

<研究ノート>日本人性の問い直しとしての多文化教育とは

MATSUO, Tomoaki / 松尾, 知明

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Lifelong Learning and Career Studies / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

117

(終了ページ / End Page)

133

(発行年 / Year)

2023-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026754>

日本人性の問い直しとしての多文化教育とは

法政大学キャリアデザイン学部 教授 松尾 知明

グローバル化に伴い国の内外の多文化化が進むなかで、異なる人々と共に生きていくことが最も重要な課題の一つとなっている。こうした課題を克服し、多文化の共生を促すためには、マジョリティの意識改革が求められるだろう。本稿では、米国の白人性研究⁽¹⁾から着想を得た日本人性という概念をもとに、日本人のマジョリティ性を問う教育のアプローチに焦点をあてる。ここで日本人性とは、「日本人／非日本人の差異のシステムによって形成されるもので、日本人のもつ目に見えない文化実践、自分や他者、社会を見る視点、構造的な特権などから構成されるものである」(松尾, 2005)。本稿では、マジョリティの日本人が、日本人性を意識化して、その社会的な意味を問い、脱構築していく教育のあり方を検討したい。

日本人のマジョリティ性を問うという意味での日本人性の概念については、松尾(1996,2005,2010)で紹介してきたが、近年になって辞典の項目として採用されたり、塩原(2014)、青木(2018)、下地ローレンス(2018)、Takahashi(2020)、坂本(2021)などで検討されたりするようになっていく。

本稿は、日本人性を問い直し、マジョリティとしての日本人の意識改革を図っていく多文化教育の枠組みについて考察することを目的とする。

1. 日本の物語と意味の生成

日本は、北海道、本州、四国、九州の四つの島と7,000に近い島々からなる「地理的領域」を意味するだけでなく、一つの「考え (idea)」であり「物語

(narrative)」でもある。日本は「想像上の共同体」であり、それが何を意味するかは、日本、日本人、日本文化などをどのように物語るかによっている。

日本とは何かを物語る場合、日本の姿をすべて語りつくすことはできず、必ず選択という行為が含まれる。選択である以上、ある語りは包摂され、ある語りは排除され、その選択を可能にする視点がある。視点が異なれば別のストーリーになるため、さまざまな内容をもつ日本の物語が可能である。

私たち自身について物語る日本という言説は、広く流布している。言説とは、英語ではディスコースというが、「あるトピックについてのお話」を意味すると同時に、「あるトピックを理解する仕方」を提供するものである。言説には、いくつかのバージョンがあるが、私たちは、それらの選択可能なバージョンの中からある言説を選択して、話をしたり物事を理解したりしている。

一方で、日本という意味の生成というものは、中立的なプロセスではない。だれが表象する力をもつのか、だれの声がメディアで流されるのか、あるいは、だれの声が公となるのかなど、その形成過程には、日本社会の権力関係が大きく影響している。

すなわち、日本についての言説は、メディアを通して繰り返し発信されながら、ある一つの声へと収束させるヘゲモニー的な力を伴っている⁽²⁾。意味生成の過程で、異なったアクセントで語られる日本についての多様なストーリーは、マジョリティの言説実践を通して、一つの公的な言説あるいは常識に回収され、正統化され自然化されていく。こうして、マジョリティの社会的現実を反映した語り口は、一般の人々の同意を得ながら常識として定着していくことになる。

しかし、ヘゲモニーは、完結したプロジェクトではなく、継続的なプロセスである。そこには、支配的な力に対抗する空間がつねに存在する。常識の形成は、矛盾をはらみ未完成であるため、そうした支配的な言説を語り直す可能性がつねに残されている。日本をどのように物語るのかについても語り直しの余地があるのである。

本稿では、日本人性という概念を手がかりに、マジョリティの視点から日本の物語がどのように構築されているのか、そうした日本の物語はいかに脱構築できるのか、さらに、新たな日本の物語としてどう再構築できるのかの

視点から、多文化共生を促す教育のあり方について考察したい。

2. 日本人性と自民族中心主義

日本人性（日本人であること）は、日本をどう物語るのかによって決定される。私たちがよく耳にする日本の言説には、日本は、血統、民族、言語、文化を共有する日本人によって構成されるとする単一民族論がある。

例えば、ベフ（1987）によれば、日本文化論における主張を分析して、日本民族は、「1. 日本列島で数千年を経て形成された。2. 先史以来血を分かち合ってきた。3.（方言の違いこそあれ）同じ日本語を話す。4.（地域差はあれども）基本的には同じ日本文化をインターナライズしている。5.（社会階層、職業、性差による違いは見られるが）同じ社会の原理のもとに行動している。」（pp.105 - 106）といった特徴があるという。これらの主張を図式化すると、日本列島＝日本人種＝日本語＝日本文化＝日本社会といった形で示すことができるとする。

さらに、このことは、「6.（先史以来血を分かち合ってきた）日本人以外は、日本語を少なくとも母語としていない。また日本文化を完全にインターナライズしておらず「日本的」社会構造の枠外で生活している。」（p.106）ことを意味するという。そこでは、日本人というものが、日本人以外の人々に対する二項対立的な特質によって定義されていることがわかる。

このような日本人／外国人、国民／非国民の区分が明確な形でつくられたのは、1899年の国籍法の成立によるという（テッサ・モーリス＝スズキ、2002）。日本人とそれ以外の人々との血統による差異によって、純粋な日本人が想像されるようになったのである。そこでは、非日本人が、われわれとは本質的に異なる者としてイメージされることで、日本人と外国人の間に越えられない明確な線が引かれることになる。

一方で、グローバル化が進み、近年では日本についての語り方にも変化がみられるようになってきている。例えば、教科書分析の研究成果によれば、平成6年度使用の教科書には、「単一民族」の用語が散見されていた。それが、政治家などによる「単一民族国家」発言への批判が強まる中で、平成12年度使用の教科書では単一民族の記述はなくなり、日本は単一民族国家ではないと

記述する教科書が目立ち始める。平成 22 年の教科書では、「多文化」「共生」に関する記述が全般的に多くなっていくという（日本学術会議・地域研究委員会・多文化共生分科会、2014）。

近年のこうした多様性をめぐる展開をテッサ・モーリス＝スズキ（2002）は、うわべの多文化主義として「コスメティック・マルチカルチュラルイズム」と呼んでいる。多様性への言及は増えたが、ここでいう文化は 1. 日常の世界とは切り離された審美的なもの、2. 管理可能な形態や空間に提示されたもの、3. 外面的な装飾にとどまり既存の制度の構造的改変を迫らないもの、4. 外見上「異質な」人間においては日本への忠誠心を示すことで許容されるものとされる（p.155）。日本社会について許容される多様性はみかけの表層的なものに留まっており、既存の基本的な関係や構造を変えるものではないものとされる。

すなわち、日本の物語の中心として日本人が位置づいており、日本人／外国人の境界が明確に引かれていることに変化はみられない。当時の状況の中で創設された血統主義の国籍の考え方は、1899 年体制として今日にも引き継がれているのである。例えば、下地ローレンス（2018）は、「混血」や「ハーフ」の言説や経験の分析を通して、日本人と外国人のカテゴリーは、自然で当たり前として定着しており、典型的な日本人でない場合には日常生活のなかで疎外され排除される状況を明らかにしている。日本人中心の物語は、そのストーリーに包含されない人々の生きづらさを生んでいるのである。

以上のように、近年の外国人の増加といった国内の多文化化や単一民族国家についての批判のなかで、日本をめぐる支配的な物語の変容が認められる一方で、多様な文化についての言及は表層的な程度にとどまり、日本人と非日本人の境界をもつ日本人像の基本的な構造には大きな変化はみられないのである。

3. 日本人性と不平等な社会構造

(1) 日本人性と自民族中心主義

日本人性（日本人であること）は、日本人／非日本人の差異のシステムによって形成されきたのものである。日本人についていかに定義しどのように物語

るのかをめぐっての支配的な言説は、文化ナショナリズム⁽³⁾を通して次第に社会の常識となっていく。そして、常識となった日本人性は、日本社会における文化的な標準、ものの見方や考え方、構造的な特権として機能することになる。

日本人性（日本人であること）は第一に、目に見えない日本文化をもつことを意味する。日本人であることは、空気のように毎日の生活のなかで意識されることはほとんどない。日本人であることが、人間一般と同様に捉えられ、普遍でありすべてであると見なされる。エスニック集団の文化が特有な中身をもつものと捉えられるのに対し、日本文化は空気のように可視化されず実体のない存在となる。

第二に、日本人であることは、自分や他者、社会をみる視点をもつことを意味する。日本社会において、何がふつうで、価値があるのかは、不可視な「日本人」の基準により決定されることになる。この意識にのほらない日本人としてのまなざしは、マジョリティの自民族中心主義的なパースペクティブを形成することになるのである。

第三に、日本人であることは、日本社会において構造的な特権をもつことを意味する。それは、日本人がマジョリティとしての力を行使するというよりは、可視化されない日本文化の実践が暗黙の了解の形でスタンダードとされることからくる。ふつうとみなされる日本人の経験、価値、生活様式は、外国人にも当然のこととして同様に適用される。あるべき常識として正統化された日本社会のルールや規範は、知らず知らずのうちに、日本人と外国人の間で、就労、居住、医療、教育、福祉等の社会の諸領域において構造的な特権として機能するのである。

このように、日本人にとって、ふつうで当然の物語のなかに、日本人の自民族中心主義的な文化実践やパースペクティブが刷り込まれている。スタンダードとしての日本人像は、メディアで消費され、イメージが定着し、次第に常識となっていく。支配的な言説となった日本、日本人、日本文化について物語は、私たちや他者、社会の理解の仕方を基礎づけていくことになる。

(2) 日本人性と構造的な特権

一方で、単純化され標準化された日本人のモデルでは語れない日本人や日本に在住する人々も少なくない。現実の日本は、日本民族だけではなく、外国人、アイヌ民族、琉球民族などのエスニックグループを含んでいる。地理的には、日本の境界は、19世紀までは蝦夷や琉球を含むものではなかったし、1894年から1945年までは、台湾、朝鮮などの植民地を含んでいた。地理的、時代的な変遷に伴い、アイヌ民族や琉球民族は日本人となり、植民地の人々も法律上は日本人であった時代があり、戦後には、在日コリアンや在日中国人として日本にとどまった人々もいる。あるいは、北米や南米に移民として移住した日本人もいる。近年では、日本に在住する外国人の数も大きく増加し、在日の外国人の中には帰化する者も増加しており、また、国際結婚により日本国籍を有する者も大きく増加している。

したがって、日本＝日本人＝日本文化といった日本の物語に包含されない日本人や日本に在住する相当数の人々が存在しているのである。日本人像のモデルの外に位置する外国人やスタンダードにあてはまらない日本人が日本社会で生きていくには、前述したような目に見えない文化的な基準、日本人のまなざし、構造的な特権にマイノリティとして対峙しなければならないことになる。日本の物語に包含されない人々は、日本社会において居場所を得ることが困難な場合も多く、生きづらさに直面することになるのである。

他方で、日本人であることは、マジョリティの日本人にとって、当たり前であり、ふつうのこととして通常は認識されることはない。こうした文化実践、見方やまなざし、構造的な特権は、空気存在を意識しないように、気づかれることのないまま日常生活のなかで繰り返し行使されていく。そのため、自らの生活経験と異なるマイノリティの視点や生きづらさは気づかれることはほとんどなく、外国人やスタンダードに合わない日本人の声は、日本社会の基準に合わないものとして知らないうちに排除されてしまう傾向にある。

こうした日本人と日本人以外の者との境界線は、きわめて高い壁として機能している。単純化・標準化されて定義される日本人の物語は、日本という実体があるとする本質主義がその核にあり、日本という対象を科学的に追究していけば、客観的な真実としての日本の姿に到達できると捉えられている。

文化を实体として捉えることを文化本質主義というが、このような見方は、集団間に越えられない境界を作り出してしまふ。日本人と日本人以外の者は本質的に異なっているため、相互理解は難しい存在として認識されてしまうのである。

こうして、常識とされる日本の物語を通して、現在の日本人／非日本人の社会秩序や構造的な特権が維持され存続されていくのである。

4. 日本人性を問い直す授業づくりに向けて

では、多文化共生の実現をめざすには、日本人性をめぐりどのような授業づくりを構想していけばよいのだろうか。

その中核には、学校での学びを通して日本人性への気づきを促し、日本人性を問い直していくことが求められるだろう。これまで、日本人の中心は隠されており、マジョリティの日本人についてはあまり問われてこなかった。しかしそこには、不平等な社会構造を形成するマジョリティの視点が隠されていたのである。したがって、日本人の中心に目を向け、日本人であることがどのように物語られているのかを明らかにしていく必要があるだろう。さらに、支配的な日本の言説のもとで沈黙してきた多様な声を掘り起こすとともに、新しい多文化な日本の物語をつくっていくことが課題となっているといえる。

ここでは、日本人性を問い直す授業づくりの視点として、(1) 日本の物語を脱神話化する批判的なまなごしの育成、(2) 多様な物語の掘り起こしと多様性の理解、(3) 新しい多文化な日本の物語の語り直しの3つについて検討を加えたい。

(1) 日本の物語を脱神話化する批判的なまなごしの育成

第一に、教科書や資料を批判的に検討することを通して、「日本」という物語が社会的に構築されたものであることを理解させ、日本人性への気づきに導く授業づくりが考えられるだろう。

日本の物語においては、日本人の血統をもち、日本語を話し、日本文化を共有する、日本＝日本文化＝日本人といった標準化された日本人像が根強く

残っている。そのため、日本を多文化に開いていく授業をデザインするにあたっては、常識として信じられている日本の言説が社会的に構築されたものであることを解明し、脱神話化していく批判的なアプローチをとることが考えられる。例えば、以下のような日本の物語をめぐる論点について、事実をもとに生徒に分析させ考察させる授業づくりがあるだろう。

・日本人の血統や固有の文化を強調する単一民族論が根強く残っているが、実際には、日本はつねに多文化社会であり、ハイブリッド⁽³⁾な人々や文化により構成されてきた。例えば、古代には、朝鮮半島や中国から渡来してきた人々が居住していたし、中国や韓国との国を越えた交流は頻繁にあり、とくに中国から渡来した制度や文化は、日本の社会や文化に多大な影響を与えてきた。こうした歴史的な事実を検討することで、日本人の純粋な血統や独自の日本文化といった物語は幻想であることに気づかせることができる。

・日本＝日本文化＝日本人といった支配的な言説があるが、実際には「日本」の境界をどう考えるかは、時代とともに変化してきている。小熊（1995）によれば、日本、東洋、西洋の3項を考えた場合、日本は、「脱亜」か「興亜」かの間を揺れ動いてきたという。戦前には朝鮮、台湾、満州へと領土を拡張したが、優越感と劣等感、先進意識と後進意識、支配者意識と被害者意識が複雑に混じり合いながら、歴史的には一貫して自己の利益の視点から「脱亜」か「興亜」かの境界が引かれ日本の物語が語られてきたという。こうした歴史的な事実を学ぶことで、日本の境界は固定したのではなく、地理的にも意識の面でも触れ動いてきたことを理解させることができる。

・長い歴史をもつと思われる日本の物語は、実際には、近代において民族の独自性が問われた時期に新たにつくられた風俗や習慣が多いという（鈴木、2005）。例えば、明治政府は、近代化を急ぐなかで国民文化を創造する文化ナショナリズム⁽⁴⁾を推進していった。1872年には太陰暦を太陽暦に改め暦の西欧化を行う際に、日本の神話の神武天皇が即位したとされる年をもって紀元元年とすることが決められた。天皇中心の歴史観は意図的につくられたのである。明治時代に国民としてのアイデンティティを形成する必要から、「伝統の創造（invention of tradition）⁽⁵⁾」が行われた事実から、日本の物語の社会的な構築性を露わにしていくことができる。

・日本は血統、民族、文化を共有するという単一民族論もまた、事実ではなく比較的最近につくられた神話といえる。戦後の復興、それに続く高度経済成長の時代に、急激に変化する日本社会において、国民的なアイデンティティが模索されるなかで、単一民族論は、社会的につくられることになる。とくに1970年代から1980年代にかけて、日本文化論が盛んになったが、日本企業が力を取り戻し、さらに世界へと進出していくなかで、純粹で本質的な日本人像といったものが構築されていったのである。こうした単一民族論が戦後に「伝統の創造」により生み出されたという事実を資料を基に明らかにする学びを通して、支配的な日本の言説を脱神話化することが可能になる。

以上のような視点に立ち、教科書や資料の批判的な読み取りなどを通して、一般に信じられている日本の物語は、歴史的な事実とは必ずしも一致しておらず、文化ナショナリズムのもとで比較的最近に「伝統の創造」の形で社会的につくられたものであることを明らかにする授業づくりが考えられるだろう。批判的に分析する力や地理的・時間的認識を育みながら、日本／非日本人の物語の構造は現実とは乖離しているという事実をもとに、日本人であることを問い直していくのである。日本人性の存在に気づき、根強く残る単一民族論を脱神話化していくことで、多文化社会としての日本社会の現実を直視していく視野を育てることが課題となっているといえる。

(2) 多文化な物語の掘り起こしと多様性の理解

第二に、日本人性の主流の言説のもとでこれまで沈黙させられてきたマイノリティの多様な物語を掘り起こすことで多様性の理解を促していく授業づくりが考えられる。

マイノリティの声 (voice) は、自明とされるマジョリティの基準から、重要でない、常識に合わないものとして周縁化されてきた。忘却されこれまで聞かれなかった数々の物語に耳を傾け、それらの声を回復していくアプローチをとることが考えられる。例えば、以下に取り上げたようなマイノリティが経験してきた物語を学ぶことで、日本の多様性を理解させる授業づくりが構想できるだろう。

・日本に在住しているが日本国籍を持たないマイノリティの物語がある。在日コリアンや在日中国人といったオールドカマーに加え、外国人労働者をはじめとするニューカマーの外国人の流入も著しく、日系南米人やその他の外国人の定住化も進んでいる。一方で、これらの外国人は、日本国籍がないため、日本社会に在住していても国民とはみなされず、納税の義務は求められるが、参政権などの市民権は認められていない状況にある。これらの在日の外国人の物語は、日本社会を構成する市民の声として広く語られていく必要があるだろう。

・日本国籍はあるが単一民族イデオロギーのもとで声をもたなかったマイノリティの物語がある。同化政策の対象とされてきたアイヌ民族、琉球民族、さまざまな理由で日本に帰化することを選択した文化的に多様な日本人、あるいは、国際結婚により日本国籍を得た日本人など、支配的な日本人の言説から排除されてきた多様な物語も掘り起こされていく必要があるだろう。

・その他、さまざまな背景をもった日本人の物語がある。例えば、海外で生まれ育った言語や文化が異なる日本人、国際結婚等により生まれたハーフやダブルと呼ばれる日本人、北米や南米へ移民として渡った日本人、日本統治時代の植民地で2級市民として扱われた日本人など、スタンダードの物語には適合しない日本の内外で生きてきた日本人の経験も語られるべきであろう。

日本社会は、現実には、多様な人々によって構成されており、また、国の内外で日本人は生きていて、さまざまな歴史や経験、文化が混在し、多種多様な物語が存在している。にもかかわらず、上記に取り上げたような日本の内外に生きる多様な人々の存在は気づかれにくく、語られることは少なかった。日本＝日本文化＝日本人といった標準とされる日本の物語から排除されてきたマイノリティの声を掘り起こし、これまで知られていない日本の多様性について学んでいくことが課題となっているのである。

(3) 新しい多文化な日本の物語の語り直し

第三に、マジョリティの物語を脱構築し、多様な物語を掘り起こすとともに、多文化という新しい日本の物語を創造していく授業づくりが考えられる。

マイノリティの視点から日本の物語を語り直したり、諸集団の関係やつながりとして新しい日本の姿を構想したり、ハイブリッドや多文化の日本をイメージしたりするようなアプローチをとることが考えられる。例えば、以下のような新しい多文化な日本を想像する授業づくりが考えられるだろう。

・マイノリティの視点から日本の物語を語り直すアプローチが考えられる。例えば、下地ローレンス（2018）は、戦後日本社会において「ハーフ」や「混血」の言説やイメージが「日本人」「外国人」のカテゴリーと表裏一体の形で歴史的にどのようにつくられていったのかについて検討している。また、インタビュー分析を通して、「ハーフ」であることが、「日本人」と「外国人」の狭間でどのように生きられているのかを明らかにしている。このように、マイノリティのレンズを通して、マジョリティとの関係のなかで形成される新たな日本の物語を描いていくことができる。

・多文化社会としての日本の物語を描くアプローチが考えられる。例えば、〇〇系日本人といった名称を使用することが提案されている（駒井、2016）。〇〇系はエスニックな出自を表し、国籍や市民権といった国家のシビックな共通性を示すものである。同書では、コリア系日本人、中国系日本人、フィリピン系日本人、ベトナム系日本人、ロシア系日本人などが検討されているが、〇〇系日本人といった用語を使用することで、日本民族とエスニックグループから構成される多文化社会としての日本を明快にイメージしていくことが可能になる。

・ハイブリッドな日本文化という物語をつくるアプローチが考えられる。例えば、日本の物語は、明治時代に西洋からの影響によって一夜に変わったような支配的な言説があるが、実際には、東アジア、とくに中国との関係が深い（Befu,p.26）。古代には、政治の制度、仏教信仰、表記体系、芸術や建築など、中国の文化が韓国を経由してもたらされ、日本の社会や文化に大きな変革をもたらしている。また、4～19世紀にわたって、継続して中国から大きな影響を受けている。このような中国との分かちがたい関係を通してハイブリッドな日本人や日本文化という物語を構想することができる。

・日本の中の地域的な多様性を語るアプローチが考えられる。例えば、日本の支配的な言説では日本の同質性や共通性が強調されるが、実際には日本には

地域に特有の豊かな文化が存在している (Befu,p.26)。日本人すべてに共通する標準語、共通語としての日本語が重視され、方言といった地方の言語的な差異は無視されてきた。同様に、一枚岩としての日本が強調される一方で、地域的な日常生活パターン、建築のスタイル、衣服、儀式、食べ物などの文化の多様性には注意が十分に払われてこなかった。こうしたこれまで見過ごされてきた地方の多様性の視点から新たな多文化の日本の物語をつくっていくことが考えられる。

上述の事例のように、日本、日本人、日本文化のなかに多文化を見つけて、日本、日本文化、日本人の支配的な物語を語り直し、新たな日本の物語を創造していく授業づくりが考えられる。マイノリティ、多文化やハイブリティティ、関係やつながり、日本の中の多様性などの視点から、日本の物語を語り直すことで、マイノリティを包摂できる多文化社会としての日本をイメージすることが課題となっているのである。

おわりに

多文化教育とは、マイノリティの視点にたち、社会的な公正の立場から多文化社会における多様な民族あるいは文化集団の共存・共生をめざす教育理念であり、その実現に向けた教育実践であり教育実践でもある (松尾、2013)。では、日本人性の問い直しについてのこれまでの検討から示唆される多文化教育の枠組みとはどのようなものだろうか。

まず、日本社会の多文化化が進む中で、多文化共生の実現をめざす多文化教育においては、マジョリティである日本人の意識改革が中心的な課題となるだろう。

日本＝日本人＝日本文化といった支配的な言説の中で、日本性（日本人であること）は、目に見えない文化実践、自分や他者、社会を見る視点、構造的な特権として機能している。一方で、日本社会に生きる外国人あるいはスタンダードには沿わない日本人は、マジョリティ中心の日本の物語には存在していないかのように扱われ、マイノリティとして自らを表象する機会をもっていなかった。

したがって、日本人のマジョリティ性を問い、日本人であることの社会的な意味を問い直して、マジョリティの日本の物語を多文化に開いていくことが課題となるといえる。

そのためには、多文化教育の枠組みとして、4章で検討したように、①日本の物語を脱神話化する批判的なまなざしの育成、②多文化な物語の掘り起こしと多様性の理解、③新しい多文化な日本の物語の語り直しが重要な柱となるだろう。

すなわち、第一に、文化ナショナリズムのもとで比較的最近につくられた日本=日本文化=日本人といった物語を批判的に読み解き、脱神話化する実践を進めていくことが挙げられる。社会的につくられている日本人性のあり様を考察することで、日本人/非日本人によって構造化され本質化された日本の物語の中に自民族中心主義的な視点があることに気づかせることを試みていくのである。

第二に、マイノリティの物語を掘り起こし、多様性を理解する実践を進めていくことが挙げられる。標準化された日本人のモデルでは語れない日本人や日本に在住する人々、日本民族だけではなく、在日の外国人、アイヌ民族、琉球民族などのエスニックグループ、国際結婚や帰化により日本国籍を有する者、その他、スタンダードの日本人の言説に当てはまらない人々の物語を知ることを通して日本の多様性を学んでいくことを試みていくのである。

第三に、多文化な日本の語り直しを新たにを進めていくことが挙げられる。マイノリティの視点から日本をみたり、関係とつながりの視点からのハイブリッドな日本を想像したり、多文化な日本の物語を構想したりして、マイノリティを包摂できる新たな日本の物語を創造することを試みていくのである。

移民時代を迎えた今日、多文化共生社会をめざすには、日本人のマジョリティとしての意識改革が主要な課題の一つといえるだろう。日本人性（日本人であること）は、私たちのものの見方や考え方や文化実践を形成し、構造的な特権として、日常生活のなかで現実の体験として生きられている。したがって、マジョリティとして日本人の自民族中心主義を克服しつつ、マイノリティの多様な物語に耳を傾けていくと同時に、多文化社会という日本の新しい物語を創造していく必要があるだろう。文化的な差異に関わらずだれも

がありのままに生きていける社会を築いていくためにも、日本という支配的な言説によってつくられてきた日本社会の不平等な構造に向き合い、多文化な日本人という新しい物語として語り直していく実践が今求められているのである。

注

- (1) 白人性 (whiteness) 研究とは、1990年以降、歴史学、社会学、カルチュラル・スタディーズ、文芸批評、法学、教育学など多くの学問領域で展開する、「白人であること」の社会的な意味を問う研究の潮流をいう。その背景には、人種主義が根強く残るとともに、人種問題が深刻さを増す中で、その根本的な解決には、人種的な偏見やバイアスといった個人的な要因だけではなく、白人を中心とした社会の構造や文化を問う必要性が認識されるようになったことがある。白人性研究は、意識されない文化的規範、構造的な特権、自己や他者や社会を見る視点など、歴史的社会的に構築されてきた白人性の解明をめざすとともに、その知見をもとにより人種的に平等で公正な社会の実現をめざしている。
- (2) ヘゲモニー (hegemony) は、イタリアの思想家アントニオ・グラムシによって理論化された概念で、文化的な支配が、上からの一方的な権力の行使ではなく、従属する集団の合意を獲得することで達成される過程をいう。それは、支配的な言説が、継続的な交渉を通しながら、常識 (common sense) として形成される過程である。
- (3) 文化ナショナリズムは、国家の文化的アイデンティティが不安定である時に、民族に共通する歴史や文化などを創造したり強化したりすることをめざす政策や活動のことをいう。
- (4) 伝統の創造 (invention of tradition) とは、古くから続いていると信じている伝統は、その多くが比較的最近に創られたものであるとする概念である。急激な社会的変化を経験した近代化のなかで、民族の連続性や独自性を示すために、伝統が創造され、国民文化の形成が促されるのである。
- (5) ハイブリディティ (hybridity) は、文芸批評のポスト植民地主義理論のなかで注目されている概念である。近代主義のなかでは、雑種であること、混じっていることは否定的に捉えられることが多かったが、ポスト構造主義の理論的な展開のなかで、ハイブリディティは、自己／他者といったような二項対立的な構造を克服する可能性をもった肯定的な概念として捉え直されてきている。

引用文献

- 青木香代子 (2018) 「海外日本語教師アシスタント実習プログラムにおける異文化間能力ー日本人性に着目してー」 異文化間教育学会編『異文化間教育』第47号、pp.35-49.
- 小熊英二 (1995) 『単一民族神話の起源ー〈日本人〉の自画像の系譜』新陽社.
- 駒井洋 (監修)、佐々木てる (編著) (2016) 『マルチ・エスニック・ジャパニーズー〇〇系日本人の変革力』明石書店.
- 坂本光代 (2021) 『多様性を再考するーマジョリティに向けた多文化教育』上智大学出版.
- 塩原良和 (2012) 『共に生きるー多民族・多文化社会における対話』弘文堂.
- 塩原良和 (2014) 「エスニシティと白人性」大澤真幸・塩原良和・橋本努・和田伸一郎『ナショナルリズムとグローバリズムー越境と愛国のパラドックス』新陽社、pp.261 - 265.
- 下地ローレンス吉孝 (2018) 『「混血」と「日本人」ーハーフ・ダブル・ミックスの社会史』青土社.
- 鈴木貞美 (2005) 『日本の文化ナショナルリズム』平凡社新書.
- テッサ・モーリス＝スズキ (2002) 『批判的想像力のためにーグローバル化時代の日本』平凡社.
- 日本学術会議・地域研究委員会・多文化共生分科会 (2014) 「提言 教育における多文化共生 (案)」 (<http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/kanji/pdf22/siryo195-5-13.pdf>, 2023年1月11日確認)
- ハルミ・ベフ (1987) 『増補新版 イデオロギーとしての日本文化論』思想の科学社.
- 松尾知明 (1996) 「多様な文化を教師はどのようにとらえればよいか」加藤幸次編『国際化時代で問われる資質・能力と教育課題』教育開発研究所、pp.86 - 89.
- 松尾知明 (2005) 『「ホワイトネス研究」と『日本人性』ー異文化間教育研究への新しい視座』異文化間教育学会編『異文化間教育』第22号、アカデミア出版会、pp.15 - 26.
- 松尾知明 (2010) 「問い直される日本人性ー白人性研究を手がかりに」渡戸一郎・井沢泰樹編『多民族化社会・日本ー〈多文化共生〉の社会的リアリティを問い直す』明石書店、pp.191 - 209.
- 松尾知明 (2013) 「日本における多文化教育の構築ー教育のユニバーサルデザインに向けて」松尾知明編著『多文化教育をデザインするー移民時代のモデル構築』勁草書房、pp.3-24.
- 松尾知明 (2019) 「多文化教育と白人性ー異文化間能力の育成に向けて」『法政大学キャ

リアデザイン学部紀要』 Vol.16、 pp.103 - 113.

松尾知明 (2020) 『「移民時代」の多文化共生論 - 想像力・創造力を育む14のレッスン』
明石書店.

松尾知明 (2021) 「異文化間能力とグローバル体験学習プログラムーキャリア体験学
習 (国際・台湾) を事例として」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』 Vol.18、
pp.103 - 113.

Kawai Y. (2020) *A Transnational Critique of Japaneseness: Cultural Nationalism, Racism, and Multiculturalism in Japan*, Lexington Books.

Takahashi F. (2020) "Japaneseness in Immigrant Education: Toward Culturally Responsive Teaching in Japan." *Educational Studies in Japan* (14), pp.15-27.

Befe H. (2009) "Concepts of Japan, Japanese culture and the Japanese." In Sugimoto Y.(Ed.) *The Cambridge Companion to Modern Japanese Culture*. Cambridge University Press.

ABSTRACT

What is multicultural education as a reexamination of “Japaneseness”?

Matsuo TOMOAKI

As globalization leads to multiculturalism both within and outside of a country, one of the most important challenges is to live together with people who are different. In order to overcome these challenges and promote multicultural conviviality, a change in the consciousness of the majority will be required. The purpose of this paper is to discuss a framework for multicultural education that will interrogate Japaneseness and seek to change the consciousness of the Japanese as a majority.

In the dominant discourse of Japan = Japanese = Japanese culture, Japaneseness (being Japanese) functions as an invisible cultural practice, a perspective from which to view oneself, others, and society, and a structural privilege. On the other hand, foreigners or non-standard Japanese living in Japanese society were treated as if they did not exist in the majority-centered Japanese narrative and did not have a voice as a minority.

Therefore, it can be said that the challenge is to question the majority nature of Japanese people, to question the social meaning of being Japanese, and to open up a Japanese society consisting of ethnocentrism as a majority to multiculturalism. To this end, the framework of multicultural education will require (1) the cultivation of a critical eye to demythologize the Japanese narrative, (2) the excavation of multicultural narratives and an understanding of their diversity, and (3) the retelling of new multicultural Japanese narratives.